

第 22 回国際統一思想シンポジウム

「諸科学の統一と統一思想:統一思想に基づいた学問にむけて」

2010 年 12 月 3 日—12 月 6 日

千葉・浦安・一心教育院

生命とは何か? 統一思想と科学の生命観を中心に

秦 成培

韓国統一思想研究院院長

統一思想研究院

Dr. Sung-Bae JIN
President, UTI-Korea

生命とは何か? 今は生命に対する定義を再び試みる時であるということができる。伝統的な生命観と現代科学が提示する生命観は互いに衝突する。生命についての科学、哲学、神学の定義は自分だけの方法論とそれぞれの固有な想像力の産物である。今や生命を定義して生命問題を扱うに際して、どれか一方の視覚だけに固執する時は過ぎた。それだけ生命はどちらか一方の言語で規定するにはあまりにも複雑で神秘的なものであるためだ。生命と生命問題の扱いにおいて、それこそ現実的な学問の連係過程と研究が要請されるのはこのためだ。現代遺伝学は生命を分子化学的構成要素に還元することで細分化させる反面、神学は生命を神的恩寵と関連させて、宇宙的キリスト論に拡大させていく。哲学的理性と想像力はこのような物理的生命と霊的生命の葛藤として発生し、“生命は果たして分けられるか?” という問題に集約される。そしてさらに、“生命は一つか多数か?” “生命の発生と成長は漸進的か飛躍的か?” という問題に拡大していく。生命の問題の扱いにおいて私たちが先ず試みなければならないことは生命の本質から離れた生命観を排斥し、生命に関する定義を試みるのが順序であるはずだからである。

1. 遺伝子決定論—機械論的還元論

原子論者(atomists)は最初の還元論者(reductionists)であるということができる。デモクリトス(Democritus)の原子論が今日広く認められている理由は、原子の不連続性を機械論的立場で眺めただけでなく、模様、大きさ、速度などと同じように、非常に小さい概念にも原則的に自然界のすべての変化と多様性を説明することができるかと仮定したところにある。彼らは最も複雑な構造を持つ生命と心を扱いながらも、それらを原則的に単純な数量的概念で理解することができるかと仮定した。ガリレイの力学は還元論的物質主義の立場に立つ二番目の試みであった。彼の見解によれば、第二性質(色、音、味など)は第一性質(運動、延長などと同じように数学的に適用できるもの)として説明することができるというものであった。

そのような概念はウィーン学派の言う科学の統一を後押しする一般的な原理になった。科学の統一という目標は、本来すべての科学的陳述を厳密な感覚資料(sense-data)の言語で定義することができるという確信、すなわち実証的言語または自然的言語に属する外縁的概念で定義することができるという確信を基盤としている。‘還元’の主題を学問相互間の領域に拡大適用してみれば興味深い問題が提起される。すなわち言語学を心理学に、心理

学を生物学に、生物学を物理学に還元する問題まで考慮してみるならば、現代学問の理論相互間の構成的側面で見ると、大変重要な問題が示唆されることになる。論理経験主義者はすべての科学が窮極的に最も普遍的な科学の物理学(すなわち、物理主義)に還元されることができると信じた。しかし結果的に、科学の統一に対する論理経験主義者などの所期の目的達成の有無は疑問の余地を残すが、彼らの理想は相変わらず科学と哲学の主要な主題として残っている。すなわち言語学を心理学に、心理学を生物学に、生物学を物理学に還元する問題まで考慮してみるならば、現代学問の理論相互間の構成的側面で見ると、重要な問題を示唆することになる。論理経験主義者はすべての科学は窮極的に最も普遍的な科学たる物理学(すなわち、物理主義)に還元することができると信じた。しかし結果的に、科学の統一に対する論理経験主義者の所期の目的達成の有無は疑問の余地を残すが、彼らの理想は今なお科学と哲学の主要な主題として残っている。

生物機械論はデカルト以来、西欧の近代科学が生命と生命体を眺める基本的な視覚と認定されてきた。このような立場を受け継いで、生物の機能と役割はもちろん、生物の進化までも包括する諸般の生物学的現象が物理的自然法則に従うという生物学的決定論が台頭するようになる。今日、生物学的決定論に関連して、生命現象を説明する科学の支配的パラダイムとして遺伝子決定論がある。遺伝子決定論は生命体の最も根本的な本質を遺伝子と見なし、環境の影響にも遺伝子とゲノム自体は変わらないと見る。換言すれば、生命体をその構成遺伝子の合体たるゲノムが産む必然的結果と解釈する。このような考えが人間ゲノム・プロジェクトをはじめとする生命工学研究の認識的土台を成しているだけでなく、リチャード・ドーキンスの‘利己的遺伝子’概念やエドワード・ウィルソンの社会生物学等を通して、社会科学と一般大衆にまで広く拡散している。生命現象を DNA 分子水準で理解しようとする分子生物学は生物学を越えて拡張し、社会学的現象も遺伝子によって決定されるという還元論的世界観を産んだりもした。

この世界観は生物有機体を物理化学的元素の総和と見ることで、核から細胞分裂を経て、有機体を形成する過程と分子が相互結合して、高分子細胞を成す過程、そして原子が相互結合して、分子を成す過程すべてを同一なるものと見る。他のものがあれば、生物は高分子細胞の結合体が単一な有機体を成して、自己の複製をなすという。このような有機体で自己複製を担当する要素が DNA である。分子生物学では DNA を生命の設計図と見て、その DNA の複製プログラムと環境による変異によって、現存する色々な生命体が出現したと主張する。

本来 DNA は4個の塩基(アデニン、チミン、サイトシン、グアニン)が特異な結合カップル(A-T,C-G)たる‘二重螺旋構造’模様を成した核酸を単位体として形成されている。遺伝子はこれらの DNA が独特の順序と機能を持った区画(section)に配列された形態をいう。遺伝形

質を決定する遺伝子(DNA)暗号は作業用複写本たる messenger RNA によって読まれるのであるが、その mRNA は遺伝子暗号を読みだすために周辺の蛋白質が作り出したものである。そうしてからいくつかの他のグループの蛋白質が関与して、mRNA の暗号を読みだし、その暗号を読みだした蛋白質によって、アミノ酸と呼ばれる蛋白質単位体(single protein unit)が作られ、何度かの複雑な変形を経た後に一つの蛋白質が作られる。このように蛋白質から細胞に、細胞から有機体に減数分裂する有機体の増殖過程は、初期に合成された DNA の塩基序列に従って、一貫した操作を遂行する手続きである。このように分子生物学的立場で見ると、生態系に現存する各種生命体の増殖は決して合目的性を帯びた目的指向的結果ではない。むしろそれは初期 DNA の遺伝と変異によって決定された有機的組織が環境的条件と相応して成された結果である。それ故、各種バクテリア、植物、動物、そして人間に至るすべての生命体らは当初 DNA の遺伝と変異の過程に潜在されていた可能性の中の一部が実現された姿に過ぎないのである。

特に、リチャード・ドーキンスは個体人間を含む生命体を DNA または遺伝子によって創造された生物機械と見て、その生物機械の目的は自己を創造した主人たる遺伝子を保存することだと主張する。したがって自分と似た遺伝子を少しでもたくさん持った生命体を助けて、遺伝子を後世に残そうとする行動はまさに利己的遺伝子から始まったものだ。このような遺伝子決定論は分子生物学でまた他の還元論の問題を引き起こす。遺伝学で生命体を一種の物理化学的構造としてのみ理解しようとする観点と生命体の特殊な形質をただ遺伝子の作用によってのみ決定されるという見解は、機械論と還元論の接近を可能にするからだ。

筆者が遺伝子決定論を還元論と関連付けて批判する理由は、それが客観的であり、価値中立的な科学理論の性格を抜け出して、一種の価値偏向的な性格を帯びているからだ。一般的に知られたこととは違って、科学は客観的な事実を説明するための理論探求の過程であるにもかかわらず、科学者たちはある前提において、科学的探求を遂行するようになるのであるが、大部分の場合、その前提と偏見は唯物論と無神論だ。唯物論と無神論は一種の価値体系である。今日科学者たちは、我知らず唯物論と無神論の価値体系を前提として科学的探求を遂行しており、これが価値中立性を強調する科学のアイロニーでもある。このような観点から見れば、還元論的性格を持っている遺伝子決定論も例外ではない。

還元論という言葉が素朴な意味で調べてみれば、“全体は部分のハブのように部分を理解すれば、全体を理解することができる”というものと解釈して見ることができる。顕微鏡によって、細胞の存在が初めて確認されて以後、細胞学が発展が成され、生命体をより小さい構成単位たる DNA の観点から理解しようとする努力が実を結び、生命について還元論的接近が可能になった。しかし還元論という言葉を実際に物理主義と関連して調べてみれ

ば、状況は少し複雑になる。生命体を窮極的に細胞と細胞の中の分子次元の遺伝子(DNA)と定義した遺伝子決定論は明確に物理主義的還元論の立場を堅持しており、したがってそれは生命体を、物理化学的性格を持つ物質と規定し、ついには唯物論の立場を代弁するようになる。

現代に至りマルクスとダーウィン、フロイド、科学的唯物論などの無神論的な挑戦はまだその勢いがそがれないでいる。生物学分野ではダーウィンの進化論が科学的真理という名で全世界の教育現場で学習され、無神論的生物学を培養している。ヘーゲル左派のシュトラウスは神の代りにダーウィンの進化論が世界をより合理的に説明する優れた理論だと主張する。彼はキリストの代りにダーウィンの進化論が倫理の根拠になるならば、神の恩寵や憐憫、愛などの倫理の代わりに、‘万人に対する万人の闘争’と‘適者生存’の強者の力が新しい倫理になると予見した。

ダーウィンは神の‘創造’を‘自然選択’に代えることによって、神の創造がなくても生物の種は自然選択によって他の種に進化すると主張した。リチャード・ドーキンスは“ダーウィンは知的に完成された無神論者になる道を開いてくれた(Darwin made it possible to be an intellectually fulfilled atheist)”と述懐し、進化生物学の立場から創造論や‘知的設計論’(インテリジェント・デザイン論)をさげすんでいる。彼は何かを設計する程度に複雑性を持った超自然的な知性があるとすれば、それはただ漸進的な進化過程において人間が作り出した最終産物であり、したがってこのような定義によって、神は錯覚(delusion)に過ぎないだけだと宣言した。神は科学的想像力を妨害する有害な‘錯覚’であるという。だとすれば、ドーキンスが主張するように、本当に神は錯覚に過ぎないのか？そして進化論の教理たる無神論から排除された神を果たして探することができるか？ここで筆者は猿が人間に進化したという呆れた主張に反論することによって感情に訴えるよりは、生命の躍動と神秘さを唯物論と機械論に還元してしまった進化生物学の問題点を批判的に考察して、統一思想の立場から生命に関する正しい定義を試みるのが、私たちが遂行しなければならない重要な課題であると考えている。

2. 生命体モデル – 全一論 (wholism)

科学を色々な理論の総体(ensemble)であるとする観点から見れば、伝統的に提起されてきた科学の統一に関する問題は、上向的な因果関係(upward causation)、すなわち物理学の言語に‘還元’する問題によって支配されてきたことを否定することはできない。言い換えれば、さらに高く、さらに包括的な存在論的次元の科学理論は、さらに低く、さらに基礎的な存在論的次元の科学理論に還元することができるかという意味であるが、これは最も低い存在論的次元たる物理学の感覚資料に関する言語と科学理論こそすべての学問の最終

的原因であるという信念が前提になっているためである。

しかし還元主義と対立する下向的因果関係(downward causation)もまた現代科学で非常に重要な意味を持つ。還元主義、すなわち上向的因果関係のモデルと下向的因果関係のモデルは互いに異なる世界観と説明方式を取る。上向的因果関係が機械論をモデルにした説明方式であるとするれば、下向的因果関係はここに言及しようとする全一論、すなわち有機体をモデルとする説明方式だ。この両者は互いに異なる世界の姿を見せている。還元主義、すなわち上向的因果関係が原子論者の機械論的世界観や唯物論、行動主義などを説明するのに説得力を持つとするれば、下降的因果関係は目的論的有機体論の世界観と唯心論、精神主義(spiritualism)等を説明するのに、より説得力を持つ。例えば、生物学の分野で細胞の分子活動統制に関する研究をする時、科学者は暗々裏に下降的因果関係のモデルを適用していることが分かる。なぜなら生物学においてそのような方式の研究はさらに高い細胞次元についての情報を基礎とし、それを原因として、さらに低い分子次元についての(細胞の)統制過程を主題とするからである。N. チョムスキーは、先天的な言語能力(普遍文法)という精神主義の仮説を採択することによって、下降的因果関係をモデルにした科学的言語理論を創案した。

このような観点で見ると、統一思想も神と精神の価値を中心にした下降的因果関係のモデルと見なすことができる。統一思想は人間の心と体を一つの統一体と見て、前者と後者を主体と対象、原因と結果、縦と横の関係と理解する。この時、心・体は因果論的原因・結果であるために、主体たる心によって因果論的原因が設定される。したがって主体-対象の関係は主体を原因とした下降的因果関係のモデルになる。例えば、人体において生命の潜在意識(心)が主体で、人体の組織と細胞(体)は対象になる。これを因果論的に見る時、主体たる生命(心)が原因になり、対象たる肉体を調節して統制すると見るのだ。このような主体と対象の関係モデルは単に心と体に限定されるものではなく、神と人間、人間と人間、そして人間と万物などすべての存在する世界を支配する最も基本的な原理となる。言い換えれば、すべての存在する世界は主体と対象の因果論的連鎖で連結した一つの秩序的な有機体を成しているのだ。自然界のみならず、人間世界も一つの秩序的な統一体を成している。このように自然界の主体-対象の秩序体系を維持する原理が自然法則であり、人間関係の主体-対象の秩序体系を維持する原理が価値法則、すなわち道徳法則だ。そしてこの二つの世界を支配する法則を探求するのが科学と哲学、芸術などすべての学問の課題となる。

そしてここで主体は対象に対して論理的に、そして価値論的に先に立つのであるが、これはあくまでも主体が主観的、能動的、中心的、縦的な価値を持つものに対して、対象は非主観的、受動的、周辺の、横的価値を持って相互関係を維持するためである。心を離れた体はあり得ないように、価値を離れた科学が成立できない理由も価値-事実の関係が主体-

対象の必然的な関係を形成するためだ。

さあ、今やそうすれば問題がもう少し明瞭になる。私たちはなぜ唯物論と機械論的還元論を批判するのか？ それはそれらの理論が提示する世界観が与えられた現象世界を正しく説明することができない誤った理論であるためである。すなわち、唯物論と機械論的還元論は世界のありのままの姿を見せてくれるのではなく、逆転して倒立した世界を見せてくれる。そしてこれらの理論は因果関係の実相を逆転させ、歪曲された形態で見せてくれている。運動の根本原因を物質に置いて、その運動の因果関係の鎖の一番下半部たる土台を唯物論に基づくと、運動現象を正しく説明することができなくなる。アリストテレス方式に従うならば、運動の原因は質料ではなく形相、すなわちエンテルレキアに起因すると主張するのであるが、これは唯物論の運動の説明方式より合理的だ。唯物論は生命の原理を歪曲しており、運動の原因を逆に説明している。生命の原理は全一論、すなわち有機体的な世界観でその説明方式を模索しなければならず、またそのようにすることが正当だと見る。

とにかく生命は有機体全体の一体性または統一性にその意味を探さなければならないだろう。常識的に考える時、死ぬということは生命を離れ、部分に分かれるという意味であり、生きているということは一つに連結したネットワークで全体的な有機的統一性を成しているという意味であるからだ。アリストテレスは靈魂または生命の機能をエンテルレケイア(entelekeia)と呼んだ。彼において靈魂を持っているということは、すなわち生命を持っているということであり、その靈魂の存在様態をエンテルレケイアとしたのである。そして彼はエンテルレケイアを靈魂の自発的な活動性を必要とものだとした。そのためにエンテルレケイアは靈魂に属する機能であって、質料に属する機能ではない。統一思想の立場から見ると、愛は形状でなく、性相に属する機能であるのと同じように、生命も性相に属する機能と見なければならない。そして統一思想の立場から見ると、運動して成長するという生命の原理は性相からの因果関係であって、形状からの因果関係ではない。

機械論では全体は部分の総和であるが、全一論では全体は部分の総和を越える。機械論は部分の総和が全体なので、基本単位としての部分が前提になったが、全一論は部分の前に全体が前提になっている。機械論においては生命を持った有機体は有機体の死滅と共にそれ自体が物理化学的な元素に分解され、有機体の生命も死滅する。しかし全一論では、生命を持った有機体は有機体が死滅して、物理化学的な元素に分解されるとしても、生命は分解されない。生命は物質構造に還元することはできないからである。このように有機体の生命は物理化学的要素に還元できないのであり、有機体全体を管掌して、有機体を超越して主導する主体であり、宇宙生命と連結した連続性である。それ故、死ぬという意味は窮極的に個体に分けられて分解されることができるという意味であり、反対に生命は個

体に分けることができなくて分解されない連続性という意味である。アリストテレスは生命が形相(eidos)にしがみついている個別実体の中の形相はやはり最高の形相(形相の形相)、すなわち、神に結ばれていると言ったが、それは統一思想の立場に類似した説明方式である。統一思想もアリストテレスと同じように、生命を性相(潜在意識)と見て、その個体の中の生命は宇宙生命(宇宙意識)と連結したネットワークの連続性とするためだ。アリストテレスが生命を形而上学的に理解したとすれば、統一思想は生命をより生物学的に理解して、現代的意味を生かしたということができる。結論的に、生命は死ねば分解される有機体の中で有機体を管掌する全一的主体だが、有機体の死滅後にも死滅しない神秘的な何かである。しかし、動植物の生命が彼ら肉体の死滅後にも死滅しないで宇宙生命の秩序に帰るとすれば、人間の生命はそれとは異なる何らかのものであるのか？

次に、統一思想の観点から現代科学の全一的世界観を検討してみようと思う。古典物理学では世界をニュートンの力学法則によって支配される規則的で決定論的な時計装置のモデルと考えた。このような見解は混沌界(chaotic system)の発見により、劇的に変わることになる。このような混沌界は外部の小さい動揺に対しても極めて敏感で、残りの宇宙から離して分離することができず、彼らの運動もまた正確に予測できないものであった。またプリゴジンは混沌の背後には新しい形態の秩序があることを明らかにした。そしてそれは精巧に均衡を成す規則的秩序によって具現された自然発生的な秩序である。このように全一的世界観は世界を分離しない全体的統一と理解する世界観だ。分子次元の力(forces)、有機体の生命力(entelechy)、動物の霊魂、人間の精神などは物質世界の特殊な機能や現象で説明するには限界がある。この精神現象はそれ自体が独立的な固有の性質を持っており、プラトンが指摘したように、物質世界と神秘的な結合をして一つの宇宙有機体を構成している。精神現象のこのような性質は量子理論で主張することと通じる面もある。デカルトの機械論的視角から見る時、精神と物質主体と客体は完全に分離して考えられるようになる反面、量子理論では両者の間の二律背反の代わりにむしろ驚くほどの力説、すなわち観察者(主体)-観察対象の全一的な相補性が存在することになる。

統一思想の宇宙論も現代科学が例示するように、生物学的な有機体のモデルを提示する。完成した世界とはあたかも一人の体と同じように細胞と細胞、部分と全体が互いに有機的な関係を結んで成される一つの統一と見られる。このように統一思想では部分を排除した全体は有り得ず、全体の目的を前提としない個体(部分)もまた存立できないと見る。この点において統一思想の宇宙論は現代科学の全一的世界像とその軌を一にするとと言える。そうだとすれば、今から本格的な論議に入って、生命は何かを論議してみよう。

3. 生命とは何か？ — 還元できるものと還元できないもの

20世紀後半は持続的な哲学の萎縮と生物学の躍進として要約される。物理学と化学を自体内に統合して、自身の成果を動物学と人間学に展開しながら、生物学的進化論は存在する全てのものの統合原理として席を占めることになる。さらに生物学的進化論は人間の精神領域にまで影響を及ぼして、倫理学と社会学の基本原則を提示している。今日生物学のDNA遺伝子コードは‘個体を跳び越える’プラトンのアイデアに相当する対応物として提示されているとすることができる。

それでは生命とは何か？ 生命に関する定義には色々なものがある。生理的定義は生命を食べ、排泄し、刺激に反応しながら生理作用をする生命体の機能であると定義する。一方、別の定義では、生命を外部と絶えず物質交換を遂行しながら、新陳代謝をする生命体の機能と規定する。次に、今日重要性が増している遺伝学は、ある個体が自己と似た他の個体を複製する生殖作用であると生命を定義しており、最後に、生命に対する生化学的正義が持つ弱点を克服できる定義として熱力学的定義がある。これは自由エネルギーの出入りが可能な一つの開かれた現象界における低いエントロピー、すなわち高い秩序を持続的に維持していく特性であると生命を規定する。本稿では統一思想と関連して、互いに対立する三つ目の定義と四つ目の定義を批判的に考察することによって、生命に関する定義を試みて見ようと思う。

第一に、生命は意識である。前にも言及したように、統一思想では生命を細胞や組織に投入された個別化された宇宙意識だと言う。個別細胞の次元で宇宙意識が浸透して、個別化されたものを原意識と言ひ、これがまさに細胞の生命である。あたかも電波がラジオに入って、音声を出しているように、宇宙意識が細胞や組織の中に入って、その細胞のすべての情報を覚知して細胞の生存を管掌する。結局、生命とは原意識のことであり、それはすなわち感知性、覚知性、合目的性を持った潜在意識である。神がロゴスを通して宇宙を創造された時、それぞれの生命体の細胞の中に特殊な情報を物質的コードの形態として刻み込んだのである。宇宙意識が細胞に注入される時、その注入された宇宙意識は細胞のDNAの遺伝情報を把握するようになる。さらに人間の身体の中に収集された各細胞と末端組織から来た情報は末梢神経を通して中央部に伝達される。そして体の中の秩序維持や情報は中央部から末梢神経を通して細胞に伝えられる。私たちの体内にある情報の交換と同じように、精神的な意識(心)と脳細胞は情報を媒介として互いに相互作用をすると見ることができる。

一般的に、生命は有機体の生命のことをいうが、生物学的な意味で生命は有機体・機関・組織・細胞・遺伝子という、各構成単位ごとに存在するものと見る。細胞は生命に必要なすべての活動を永続できる生命物質の最も基本的な単位であり、他の言い方をすれば、生命が宿った小さな部屋である。統一思想は生命を細胞次元に個別化された宇宙意識と規定する

ことによって、個別細胞の生命と有機体の生命、そして宇宙に偏満する宇宙意識を意識の連続性の次元で扱う。そのために本質的意味で生命というのは、分離したり、切れたりしない連続であり、一つの巨大な単一性(unity)であり、絶えず情報が交流して流れる純粹持続である。生命の連続と意識の流れの中で分けられるということは、すなわち断絶であり、死を意味する。そのような意味で生命は分けられないものであり、死なないものである。私たちはここで新プラトン主義の一者(einai)を見ることになってベルグソンの純粹持続と出会うようになる。新プラトン主義で一者とは、本来神的本質たる生命が発出して、人間と生物の魂に分有されて、また帰還する一大連続的流出の過程を経る。

ベルグソンにあって、生は純粹持続であり、躍動(elan vital)する生である。ベルグソンは‘偶然’による‘自然選択’を主張する進化論を唯物論と規定し、進化とはむしろ生自らの躍動による創造的進化であるという点を強調した。彼は機械論と目的論のすべてを原因と結果の前後関係、または逆転した前後関係と把握する決定論で解釈して、それらを時間の持続を分けて空間化しようとする誤った形而上学だと批判する。彼は植物は空気と水と土から自己の存続に必要なエネルギー、すなわち炭素と窒素を吸収して、有機物質を作る能力を持っているといった。また生物は自体内で進化しようとする内在的性向があると見て、個体の形質の中には変異の根本原因になる生命の躍動があると考えた。そして生命の躍動は個体の意識的な努力ではなく、生命自らの一種の無意識的直観によって成り立つものと考えた。彼は人間の知性は生の純粹持続や躍動を理解することはできず、むしろ意識の直観だけが生と純粹持続を感知することができるという。統一思想のように、ベルグソンも生を持続と流れと見て、生きている生命を直観することによって、物質文明を糊塗する機械論と唯物論を克服することができることを主張した。以上で見たように、統一思想では生命を原意識や潜在意識と見て、生命は物質的要素には還元できず、しかもどのような物理化学的要素に変えることもできない。細胞はもちろん物理化学的要素の物質でできているが、細胞を構成している要素はこのような物質だけではない物質+ α でできている。しかしその+ α は物質に還元できない何らかのものが、すなわち生命である。

次に熱力学法則と関連して生命を定義した科学的見解を調べることにしよう。閉鎖系では、熱エネルギーは最大の無秩序状態、言い換えれば、使用不能なエネルギーの平衡状態へ向かう。いわゆる熱力学第2法則(エントロピー増大の法則)で有名なルードヴィヒ・ボルツマン(Ludwig Boltzman)が熱死と呼んだ状態に至るようになっている。もし宇宙全体が一つの閉鎖系ならば、宇宙はエントロピー増大の法則によって完全な無秩序状態の死滅の状態になってしまうだろう。しかし生命現象は自然界の他の一般的な物質とは全く違った様相を見せている。熱力学第2法則が見せているように、自然現象は時間の流れに従って無秩序な混沌状態に進むことを証明するのに反して、生命体は時間の流れの中でいつも秩序を構築して、その秩序の中で自己の機能と形態を維持する存在である。ボルツマンは1886

年に生命体が生存するように努めるのは元素を得るためではなく、むしろエントロピーを得るためである、とした。ボルツマンの生命現象に関する洞察に感銘を受けた量子力学の創始者シュレジンガーは1944年にダブリン高等研究所で行った講演を土台に、“what is life”という小冊子を書いた。これが分子生物学の第一歩になった本で、この本でシュレジンガーは純粋な物理学者の目で生命に関する問題を提起した。シュレジンガーは生命体が分子構造の中に生物学的情報を保存して伝達すると見た。彼は生命体を理解するために、この分子の暗号を解いて、当時の物理学的法則、すなわち熱力学法則の水準を越えようとした。彼の問いは分子の水準で遺伝に関する問題を調べることであった。例えば一定の秩序でどのようにまた秩序が創出されるのかの問題であった。特に細胞内で多い分子の集合は統計学的に無秩序になる可能性が高いにもかかわらず、どのように秩序を維持することができるかの問題であった。シュレジンガーは彼の著書で、単一生命体の個別生命体的概念を驚くほど鮮明に見せている。生物がエントロピーの低い状態を維持しようと努力するのは生命現象にはエントロピーが減少して、秩序を作り出す可逆過程があることを意味する。このようなエントロピーの可逆過程をシントロフィー(syntropy)またはネグントロフィー(negentropy)という。ネグントロフィーの導入は生物が単純な要素から複雑な構造を、無形のものから統合されたパターンを、混沌から秩序を作り出す高度の複雑な能力を指示するのだ。このように生命体は他の事物とは対立するネグントロフィー法則が適用され、物質とは異なる神秘的な何かだと言うことができるのであるが、古くから人々はそれを生物の魂、精気、精霊、魂などと呼んできた。今日の分子生物学と遺伝学はシュレジンガーが意図した方向とは違った方向に流れたが、彼が提起した問題は生氣論と靈魂、そして生命の原理に関する問題であった。

第二に、生命は個別生命体の生命である。そして宇宙は個別生命体生命の広大なネットワークだ。上で言及したように、生命は細胞単位の原意識を称するが、日常的な意味で独立的な生命体は数百億または数千億の細胞が集まって、一つの体を成す統一体を称する。しかるに統一思想では、この一つの体を成した統一体は数多くの細胞が集まって構成されたという意味で見る時‘連体’となる。しかし他の個体と区別される独立的な個体という意味で見る時には‘個性真理体’だ。本来生命というのは細胞次元の個々の生命を意味するというより、独立的生命体たる個性真理体、すなわち個別生命体の全生命を意味すると見ることができる。なぜなら細胞は生きているが、半分に切れた動物を生きたということができないように、生命は霊肉合わせた性相と形状の統一体でその意味を持つためだ。このように、生きているということは生命の単一性と統一性を成している独立的な有機体の状態を意味する。

生命の最も基本的な原理は一つの独立的な生命体であり、部分に分けることができないということだ。例えばウサギを構成する細胞を全くケガしないで二切れに分けた場合、そ

の細胞は生きているが、ウサギは死ぬ。ウサギの生命は死んだが細胞は相変わらず生きていてこれを通して、複製も可能ならば‘生命は果たして何か’尋ねないわけにはいかなくなる。この問題に対して 1950 年代ウクライナのニコラス・ラセプスキー(nicholas rashevsky)は生命を理解する最も重要な公式を紹介した。彼は生命現象に数学的模型が使われる物理学の原理を適用することが、それほど役立たず、有機体(organism)と有機的生命全体(organic world as a whole)の生物学的一体性(unity)を現わす原理を適用すべきだと主張した。生命の真の姿は細胞の間に緊密な連結網を成しながら、その中で生命現象が進行する一つの全体有機体を把握した時、はじめて現れるからである。

このように生命体において生命の原理は‘全体が部分に先行する’ということだ。この命題を細胞次元の一つ一つの生命と生命体次元の全ての生命に適用してみれば、‘全ての生命が一つ一つの生命に先行する’という命題に還元することができる。この言葉は生命体の生命に関する限り、一つの有機体全体において一体性(unity)を持つ全ての生命を前提とする時にだけ、細胞次元の個々の生命(unit life)が意味を持つことができるというのだ。なぜなら生命体から全ての生命と個々の生命は互いに分離して考えることができないためである。これは私たちの素朴な常識的な生命観とも符合する。生命の死とは全ての生命の死を意味することであって、個々の生命の死を意味するのではない。統一思想では宇宙意識が一つの細胞の中に個別化されて現れた原意識を生命と定義しているのであるが、これはあくまでも細胞次元の個々の生命)に言及したことであり、個別単位の生命を定義したのだ。しかし実際に細胞次元の個々の生命は一つの有機体を成した個別生命体の全生命を前提とする時、はじめて成立することができ、またそのような事実は統一思想ですでに前提になっていると見なければならぬ。

アリストテレスは彼の形而上学のモデルとして生物学を設定し、彼は生命現象を中心に思索を展開した。生命の原理たるエンテルレケイアは個別生命体の形相(eidos)中ですでにその生命運動の原因と目的を提供している。本来、動物的存在たる人間は神的な精神から理性を与えられてはじめて理性的な動物になった。したがって人間は自身の理性をより完全に育て、純粹精神である神の生命に参与するのを存在目的とする存在である。このようにアリストテレスにおいて、生命は個別人間と神の精神を連結する運動の原理であり、人間の生の合目的性を実現する意味を持つ。

しかるに、ここで私たちは統一思想で言及した宇宙に偏満する‘宇宙意識’と生命体に潜入した‘潜在意識’が何かに対する問題を提起することになる。一方、統一思想では生命を‘原理の自律性と主管性’という。この定義は神のロゴスによる創造を背景にしたことによって宇宙に偏満する宇宙意識が生命体に投入され、生命体のすべての情報(ロゴス)を覚知するのであるが、このような生命体の覚知状態を潜在意識という。このような個別

生命体次元の潜在意識を生命体の「(全)生命」と呼び、これは宇宙意識が細胞次元で個別化された原意識になるのと同じ方式で成り立つ。一方、ロゴスとは宇宙に偏満する‘情報の海’ということができ、遺伝子や生命体もロゴス、すなわち‘情報’の総和体である。このような観点で見る時、生命とは生命体に宿った潜在意識で生命体の情報を把握する心である。生命をある物理的エネルギーや物質として理解してはならない理由はここにある。

さらに統一思想では“生物の成長は生命、すなわち原理の自律性と主管性に起因し、それは生物体に潜在している意識とエネルギーの統一物(意識性エネルギー)であるとし、意識性エネルギーの運動がまさに生命運動である。”と記述している。ここに言及した意識性エネルギーとは情報の流れを可能にするある場を意味するのであり、物理的エネルギーを意味するのではない。このように統一思想は、この意識を生命の原理と解釈し、したがって本来の生命は物質にしがみついているのではなく、意識にしがみついていることを見せている。このように生命は肉体で発現するのではなく、人間の霊魂で発現する個別生命体的性格を持っている。素朴だが生命は性相と形状の統一体たる独立的個体の生命体をモデルとする時、その真の意味が現れ、それにとまなう倫理的性格も解明することができるはずだ。

生命の基本単位は生命体としての個性真理体である。さらに、統一思想の個性真理体と連体の相関関係で構成された宇宙全体のモデルは生命体モデルに該当する。人間を小宇宙と解釈したストア哲学のように、統一思想では個体人間の個性真理体の中で宇宙全体の姿を投影して見るができるが、その個性真理体は他の個性真理体との全体関連性で存在して理解しなければならない。これが個性真理体と連体との相互関連性をもって構築された宇宙の全体の姿である。個性真理体の複合構造で成り立った連体とその連体のより大きい複合構造で成り立った全体的連体が宇宙であり、この宇宙がまたやはり一つの個性真理体である。宇宙は宇宙に偏満する宇宙意識(ロゴス)がすべての個体に浸透し、個別化されてその個別化された意識、すなわち生命のモナドが一つの個性真理体を成すようになる。このように宇宙とは生命のモナドから成り立つ個性真理体の荘厳な合目的的連体構造なのである。

私たちはここでイエズス会出身の古生物学者ティヤル・ド・シャルデンの「オメガ・ポイント」を連想することになる。「オメガ・ポイント」は統一思想で宇宙を「創造目的を完成した一人の人間」としてモデル化したのと似ており、その点で興味深い。彼は進化論的科学的観とキリスト教信仰の楽観論を総合して、進化過程の終着地の完成した宇宙と宇宙的キリストを一致させる。さらに、地球で唯一度の現象たる生命の誕生と生命の目的地たる意識と思考の人間化の過程を記述する。そして進化の終着地を進化に先立って存在した宇宙的キリストの神聖化の過程だと主張し、その一致点を「オメガ・ポイント」といった。

このような試みは地質学的進化とキリスト教の目的論を無理に関連づけることによって説明上の難点を招来したが、生命の発生と宇宙の人間化モデルを設定したという点で統一思想の立場で吟味してみる価値があると見る。

最後に生命は自我(self)である。この題目に至って、私たちは少しためらうようになり、論理的飛躍があるのではないかと心配しながら、論議の結果に注目するようになる。しかし生命を神の本質と規定する神学的解釈が抱いている論理的負担よりははるかに合理的説明が可能だと考える。

統一思想では細胞次元の生命(原意識)を‘低次元の心’と定義しており、それをまた「感知性、覚知性、合目的性を持った潜在意識」(New Essentials of UT,1994,559)と理解する。そして神様がロゴスで宇宙を創造する時、生物の種族保存のためにその個体に固有なすべての情報(すなわちロゴス)を物質的形態の記録(暗号)で細胞の中に封入しておいたと見る。その暗号が DNA の遺伝情報として、上に言及したアデニン、チミン、サイトシン、グアニンなど 4 種類の塩基の配列形態に従って遺伝子の特性が変わる。生命(潜在意識)はその遺伝情報を覚知する機能を持っている。蛋白質が DNA の作業用複写本たる mRNA の遺伝情報を読むことができるのも、生命の意識作用たる知覚力のためだ。DNA も遺伝情報を含んでいる担架体(carrier)に過ぎず、DNA の情報を読む蛋白質もまた生命の担架体だ。

それ故、DNA と蛋白質を含んだ細胞全体に浸透していた生命は DNA の遺伝情報はもちろん、細胞の組織と構造など有機体全体のすべての情報を知覚できる機能を潜在的に備えている。したがって生命は DNA に先立つ。これは「意識は存在に先立つ」という哲学的命題のような脈絡で理解することができる。換言すれば、生命(潜在意識)は生命体全体の情報を知覚できる潜在的な意識であり、したがって DNA に先立つ。ここで私たちは「全体は部分に先行する」という生命の原理を再三確認することになる。統一思想の有機体モデルは全体目的と個体目的の相関関係によって全体目的を個体目的に先行すると設定する。これを進化論と関連して、発生学的に考察すれば、興味ある問題が提起される。すなわち「卵が先か鶏が先か?」という過去から絶えず提起されてきた問題がそれだ。その問題は生物の進化と関連して「DNA が先か、生命体が先か?」の問題として浮び上がり、分子生物学で「DNA が先か、DNA の遺伝情報を読む蛋白質が先か?」の生命発生の問題に飛び火したりもする。遺伝決定論者や進化論者はこの問題に対して、前者を支持し、生氣論者や‘知的設計論’者は後者を支持するだろう。

これらの諸問題に対する議論は本稿の領域を越える問題なのでここでは扱わない。しかし生命体の問題と関連して明らかなのは、生命は DNA に先在するという点であり、したがって生命は論理的意味で、発生論的意味で見ると、DNA に先立つ。このように生命は

部分より先行的に作用し、部分の変化を全体的に調節する機能を持っている。そして生命体個体の自己の体系的構造を越えるという意味で超越的だ。生命は決して部分を合わせたものではなく、より大きい全体の中での統合的な作用を遂行している。このような生命の全体的調節能力を物質的な種によって大事に保管したのが DNA ということができる。しかし DNA 自体を生命と見ることはできず、それは物質的形態を持った生命の媒介物である。そのために科学者がいくら DNA を複製するとしても、それは生命体の形状を作るということだ。科学者が作ることができるのは生命自体ではなく、生命を持つ担架体に過ぎないのである。

統一思想の立場では、生命とは DNA や生物有機体の各部分を合わせたものを越え、有機体全体を管掌する意識、すなわち潜在意識である。生命は生物有機体の領域に含まれるのではなく、それを越えるという意味で超越的だ。このように生命の自律性が有機体に対して超越的に作用するとすれば、生命は果たして魂とどんな関連性を持つのであろうか？ 本当に人間には先験的的自我と言える独立的な靈魂があるだろうか？ 生命の超越性と関連して、これからこの問題を本格的に考察してみよう。

統一思想の観点は精神主義や物質主義一元論でもなく、また精神/物質の二元論でもない。統一思想の原相構造によれば、すべての存在は性相と形状の二性性相の特徴を持って存在する。このような性相と形状は互いに主管し、主管を受ける主体と対象の関係として、一方では、主導的で能動的な役割をする反面、他方では、非動的で受動的な役割をする。性相と形状の相対的關係を、生命を中心に考察してみる時、人間は意識(心)/有機体(体)の統一体と霊人体/肉身の統一体と区分して見ることができる。まず意識(心)/有機体(体)の統一体の場合、人間は他の生物と同じように、自律性を持った意識(生命)が有機体を主管する主体的役割を担当するようになる。この場合は上で調べて見たことと同じだ。しかるに、人間の二性性相を霊人体/身体/肉身の統一体と規定する場合、生命は霊人体とどんな関連性を持つのかという問題が二番目に台頭する。

統一思想から見る時、細胞次元の低次元の心の原意識に対応する有機体次元の高次元の心は何か？ 細胞次元で調べて見れば、原意識の細胞の生命は細胞の組織と内容全体を知覚し、また肉体次元の有機体全体の生命と連結している。この時、細胞次元の生命を低次元の心、すなわち魂(psyche)とすることができ、有機体たる肉体次元の生命を高次元の心、すなわち靈魂(spiritual soul)とすることができ、有機体次元の高次元の心は人間の認識行為と関連する。人間の認識に関していう時、高次元の有機体生命(潜在意識)、すなわち靈魂の認識能力は細胞次元での生命の知覚能力と類似した方式で機能する。枝葉細胞次元に宿った心(意識)や脳細胞次元に宿った心(意識)など、すべてがそれぞれの心(意識)の中に原形を潜在的に備えている。その原形は外部の経験的対象を判断する基準として心の中に潜在的に

内在している。このように潜在的原形と経験的内容の対応が人間の認識行為である。どのように見れば、プラトンが主張するように、人間の認識行為とは生命自体の意識の流れの中に潜在的に備えている原形を外部経験を通して想起するのかわからない。またどのように見れば、現象学で主張するように、心とはすでに自体の中に潜在的な原形(ノエマ)を持って認識対象に向かって意味を尋ねる意識の指向性(noesis)なのか分からない。とにかく統一思想では人間有機体次元で認識行為を主導する心の潜在意識に言及しており、この意識を生命と規定している。このように人間は意識を持って認識行為をする意識生命体であり、その意識(生命)をして肉体を主管し管掌させる自己超越的主体である。一般的にこの自己超越的主体は霊魂または霊人体と呼ばれ、肉体を超越した自己超越的モナドだ。私たちはそれを‘自我’とよぶ。

上に調べて見たように、統一思想の霊人体は人間の本質と関連してみる時、通俗的な意味で‘自我’と呼ぶことができる。それは生命有機体全体の生存と繁殖を主管する自己超越的意識であり、自律性であり、生命それ自体だ。現代脳生理学は意識という用語を脳の活動過程自体の統合的で動的な特性であり、脳の活動の中心構成要素と、新たに認識している。スペリ(R.W.Sperry)は意識上の主観的な経験を脳の機能の中の決定的な原因と見たし、脳活動で起きる物理・化学的な事象の過程を調節するにあたって、統制的な影響を及ぼすものと把握した。ある意味で見れば、脳の中で心が物質を動かすのであることであるが、これは有機体が自らの構成要素の機関と細胞を統制することや分子が自らの電子で起きる分子過程(molecular course)を統制するのと同じことだ。客観的な科学とその理論で脳を説明し、規定する意識的な心(conscious mind)は心が行動を統制するという常識的認識と異なるところがない。ここに言及した「意識的な心」とは、それ自体が自律性を持った生命であり、脳活動を統制する超越的主体として肉体に対応する自己超越的モナド、すなわち「自我」を称する。ブレンターノは自分意識の本質とは認識する主体と認識する対象を区別する能力だと説明した。そしてその自己意識の原理で指向性(intentionality)に言及した。物理学分野でハイゼンベルグも観察者(意識)と観察対象を二つとも扱う物理学が取り扱われなければならないという点を強調している。ギルバート・ライルは、心とは精神を傾ける作用と定義した。脳生理学者エクルスは脳と自我意識的な心を明確に区別することによって心と体の相互作用説を主張した。

エクルスはポパーとの共著『自我とその脳(Self and Its Brain)』の中で、意識が作用する度に関心を傾ける集中現象が連結脳の神経現象と関係があることを実験を通して見せてくれた。彼は意識過程自体と神経活動を同一視する同一論(identity theory)に反対して、意識現象を起こす自我と脳をそれぞれ独立的な実体と見た。彼は(私たちが話す時)思い出さない単語を思い出す意識の集中現象を説明しながら、自我の意識現象と物理的神経現象の間の時間差を実験を通して見せてくれた。この事実は意識主体の自我と脳が互いに独立的に存

在するという事実とこの自我と脳が互いに相互作用するという事実を科学的に明らかにしたことのもとして意味を持つ。

私たちは上に言及した自我が生命の終わりであり、生命ネットワークの全体ならば、生命に対する人格主義的モデルと人格主義的倫理を提示できる。しかし自我の生命は全体目的と関連してより大きいネットワークを形成するから、窮極的に宇宙生命との連続性でもって生命のモデルと生命倫理のモデルを提示しなければならない。そのモデルは全体のネットワークと関連した全一的な有機体のモデルになるのであり、さらに合目的な性格を帯びた倫理モデルになるだろう。

4. 新しい生命倫理のモデルに向けて

私たちは上で統一思想と科学を中心とした生命観について調べて見た。本セミナーと関連して、上に考察した内容は生命倫理の予備的考察の性格を持ち、生命倫理を定礎するのに基礎的な役割を遂行するものと信じる。人間学と倫理学が一对を成すように生命と生命倫理は互いに抜きにしては考えられない概念であるためだ。本稿では紙面の関係上、統一思想から見た生命と関連した望ましい生命倫理モデルの構築のための提言程度でこの文を終えようと思う。

第一に、生命と関連して生命倫理を考察するにおいて、現代生物学に関する研究結果を無視してはならない。一部の科学者は生命を物理主義的立場で解釈し、それにとまなう唯物論的快樂主義と功利主義的倫理観を好むが、このような物理主義の独断と唯物論的倫理を生命倫理と規定することはできない。しかしそれでも生物学の客観的事実を無視して生命倫理を基礎づけることはできない。なぜなら生命倫理が生物学によって演繹的に導き出されるのではないが、生物学との関連性でもって生命倫理を規定しなければならないためだ。たとえば、DNA再調合技術や堕胎に関連した試験管ベイビーの手術法、そして生物学的脳死判定の基準などがそれだ。このような生物学研究の結果は生命倫理定礎の必要充分条件ではないが、先行しなければならない必須課題である。

第二に、新しい生命倫理を定礎するにおいて、伝統的な人間観に対する理解とそれにとまなう人格主義倫理観を包容し、それを越えなければならない。統一思想で生命倫理を扱うにおいて、伝統的な倫理モデルに固執してばかりはいられない。例えば功利主義倫理と目的論的倫理の衝突がそうであり、カントの道德法則とアリストテレスの倫理的徳論の衝突もまたそうである。そして環境問題に関連して、人間中心倫理と生態学的倫理の衝突も同じである。生命倫理を扱う際に、私たちは伝統的倫理の一側面だけを重視して、それに固執してはならない。しかし統一思想の生命倫理を定礎するに際して、伝統的倫理のモデ

ルを見過ごしてもならない。生命についての伝統的な人格主義倫理は私たちに人間の生命に対する尊厳性と価値を呼び覚ます。健康と生命、徳義倫理、義務の倫理、そして人間の責任などは伝統的人格主義倫理観の **key word** だ。このような生命についての人格主義モデルは上に言及した生命を「自我」と定義した解釈と関連し、その解釈から導き出された倫理モデルといえる。

第三に、新しい生命倫理は神主義に立脚した倫理モデルを提示する作業だ。神を前提にすること！ これは信仰を前提にする時には可能だが、科学と理性の次元で議論するには困難が伴う。自然神学の立場でならできないこともないが、とにかく論理的に難しい課題であることには間違いない。しかし幸いにも、生命倫理を適用するにおいて神を前提にしなくても接近できる道がある。それが心情倫理の道だ。心情倫理は生命倫理を確立するのに非常に適合したモデルであり、両者は互いに整合的である。統一思想で生命を意識と定義した時、前提になる宇宙意識とはすなわち生命の海であり、情報の海であり、愛の暗号が偏満する海である。このような観点から見れば、心情倫理は生命倫理のモデルになることができる十分な資格を備えている。しかるに、心情と生命の原理が「利他的」である反面、ドーキンスが遺伝子は「利己的」だというために現代生物学との衝突がある。生命倫理は利己的なものか、利他的なものか？ このような諸問題が統一思想に関連して、私たちに残された生命倫理の課題だといえよう。